

学級担任とスクールカウンセラー等が連携した、広汎性発達障害の診断を受けている小学2年生の児童に対する支援事例

1. 事例の概要

A児は、通常の学級に在籍する小学2年生である。広汎性発達障害の診断を受けている。授業中に教室内を立ち歩いたり、教室外へ出て行ってしまったりする様子も見られる。また、他の児童とのトラブルも多くみられる。このような状況の中で学習に参加することが難しく、「注意される→嫌な気持ちになり反抗する→怒られる→教室を出て行く」などの問題行動がみられ、暴言等も多くなってきた。

そこで、大学教員からのA児がどのような時に問題行動が現れ、どのような時に適切な行動がとれるのかというデータを基に、学級担任とスクールカウンセラー、特別支援教育支援員、合理的配慮協力員等のA児に関わる関係者が連携し協力して、A児に対してソーシャルスキルトレーニング等の支援を行うとともに、スクールカウンセラーがA児の保護者に対して教育相談、支援を行った。

キーワード 立ち歩き、暴言、関係者の連携、ソーシャルスキルトレーニング、保護者支援

2. 児童の実態

A児は、B小学校の通常の学級に在籍する小学2年生である。広汎性発達障害の診断を受けている。授業中に教室内を立ち歩いたり、教室外へ出て行ってしまったりする様子も見られる。また、他の児童とのトラブルも多くみられる。このような状況の中で学習に参加することが難しく、「注意される→嫌な気持ちになり反抗する→怒られる→教室を出て行く」などの問題行動がみられ、暴言等も多くなってきた。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 特別支援部会を週1回開いて現状報告をし、今後の改善点を話し合っている。その内容は特別支援教育コーディネーターが全職員に伝達し、職員間の共通理解を図っている。また、必要に応じて、専門的知見のある大学教員やスクールカウンセラーを交えてケース会議を開催している。【基礎2】
- 特別支援教室に個々に応じたレベルのワークシートや、状況にあった教材を準備し、全児童が利用できるような教材の充実を図っている。また、個別指導に用いるかるたや、ことばあつめカードなどの手作りの教材も確保している。【基礎4】
- 必要に応じて教室内指導と、個別学習指導ができるよう、合理的配慮協力員と合理的配慮支援員及び支援員を配置している。また、週1回スクールカウンセラーが来校し、カウンセリング及びアドバイスを実施している。【基礎6】

4. 合意形成のプロセス

B小学校では2年前に特別支援教室が開設され、学習や生活上の困難を有する通常の学級に在籍する児童生徒に対して、合理的配慮協力員が巡回や観察を行い、話し合

いを踏まえて、教育相談及び学習支援を行っている。

A 児については、担任と保護者が連絡帳を通して様子を共有するとともに、スクールカウンセラーが保護者をサポートするために、教育相談を行っている。また、合理的配慮協力員によるソーシャルスキルトレーニングも実施している。これらの取組の中で、具体的な支援やその後の A 児の変容を伝えることで、合意形成を図っている。

5. 合理的配慮の実際

- 日常に沿った合理的配慮協力員によるソーシャルスキルトレーニング（写真）を定期的に個別で行った。【合理①－2－3】



写真 ソーシャルスキルトレーニングの例

- 専門的知見のある大学教員に相談し、助言を受けた。問題となる行動について、アセスメントを行い（離席→遅刻→暴言暴力）、アセスメントシートを元にデータ化して、どのような時に問題行動が現れ、どのような時に適切な行動がとれるのかというデータを基にケース会議を開き、担任をはじめ A 児に関わる教諭で現状を共通理解し、指導に生かしていった。【合理②－1】
- 担任が保護者と連絡を密に取り、B 小学校で A 児に対して取組んでいることを知らせた。また、保護者に対して、2 週間に 1 回のペースでスクールカウンセラーとの教育相談を行い、保護者の心理面を支えるように配慮した。【合理②－2】

6. 本事例の成果と課題

担任が連絡帳に学校での姿を丁寧に書くことで、保護者にとっては、担任がいつも見てくれているという安心感につながり、信頼関係をつくることができた。A 児の良さを認める関わりについて、保護者や学校の教職員で共通理解し、同じ方向で向き合うことができた。週 1 回のソーシャルスキルトレーニング、スクールカウンセラーによる保護者の教育相談と A 児のカウンセリングは、A 児の課題の改善につながった。

A 児は、2 年生になり、日常生活の中で、不適応行動が多くなったが、担任、スクールカウンセラー、合理的配慮協力員が連携し、それぞれの立場で関わりを持つことで、穏やかに過ごせる日々が多くなり、他の児童とも上手に過ごせる時間が増えてきた。しかし、A 児の学習意欲の向上や A 児の授業に集中することについては、今後更に工夫が必要であり、例えば、見通しのもてる授業やメリハリのある授業を行うなどの工夫が必要と考える。また、今後、A 児の学年が上がると内容も難しくなるので今までよりも不適応行動を起こすことが推測される。A 児が不適応行動を起こさないための環境作りを学級・学校全体で考えていく必要がある。